オイディプスと *καιρός*
―ソポクレス悲劇の根柢にあるもの―

平　野　陽　一

ソポクレスの悲劇『オイディプス王』の第一エペイソディオン後半には、テーバイの市を次々と襲う災悪を憂うオイディプス(Oe)が、盲目の予言者テイレシアス(Te)を迎えてその卓越した知にすがろうと次のように言葉を交わす場面がある。

Te. ああ、なんと恐ろしいことだろう、知っていても何の役にも立たないときに知っているということは。この事をよく分かっていたのに忘れていた。そうでなければ、私はここに来なかっただろうに。
Oe. 何のことだ、御身は心虚ろな様子で入ってこられたが。
Te. 私を家に帰らせてください。もし私の言うことをお聞きいただければ、あなたはあなたの、私は私の重荷に耐えるのもいと容易いことでしょう。
Oe. なんと、不誠実なことを言われるではないか。また、言葉惜しみするとは、御身を養い育ててくれたこの祖国に対しても好意的ではない。
Te. あなたの仰ることも時宜(カイロス)にかなってはいないように思えます。
ですから私も同じ目に合わないようにと・・・
Oe. 神々にかけてお願いする、もし知っておられるのであれば背を向けないでくれ。
わたしたちはみな嘆願者となって御身の前に跪いているのだから。
Te. あなたがたはみな、何も知らぬからだ。けっして私は禍いを明かしたりはせぬ、あなたの禍いと呼ばぬとすれば、この私の禍いを。(316-329)

国王の身でありながら膝を屈してまで教えを乞おうとするオイディプス。一方、父親を殺し母親を娶ったオイディプス自身の罪の穢れが、いま市に降り続く禍悪の原因であることをすでに見通しているテイレシアス。託宣の言葉を求める王に対して、この予言者は頑なに言葉を避けようとする。その態度を不誠実だと訝るオイディプスを相手にテイレシアスがこのとき口にするのは、王の「発言は時宜(カイロス)にかな

ってはいないように思える」(*ὁρῶ γὰρ οὐδὲ σοὶ τὸ σὸν φώνημ' ἰὸν πρὸς καιρόν*) (324-5) といういささか曖昧な一言であった。この言葉の真意が理解できないオイディプスは苛立ちながらテイレシアスをさらに問いつめ、ついに「あなたこそ、探し求めておられるあのお方（先王ライオス）の殺害者だ」(362) という決定的な回答を得る。いま、両者は第一エペイソディオンの終わりまで続く論争（アゴーン）の場面の端緒に立ち、オイディプスはその破滅に向けていよいよ一歩を踏み出そうとしている。

そこで問題として取り上げたいのは、テイレシアスのこの台詞をどのように解釈し、この悲劇にどう位置づけるかである。<*καιρός*>という言葉それ自体は、ある行為を選択し実行に移さなければならない時点、必然的状況を指し、ひとまず「時宜」「好機」「危機」などの訳語が当てられる[1]が、以下、簡単に諸家の見解を振り返ってみたい。

まず、R. C. Jebb (1914)[2]はこの箇所の<*πρὸς καιρόν*>を<*καιρίως*>と同義とみて、端的に「時宜にかなっていない」(not ... in season) の訳語を与えており、他の大多数の訳者・注釈者もほぼこの線に沿って解釈している。この場合、オイディプスの「発言」(*τὸ φώνημα*) がこの場に「相応しくない」「不適当である」というやや鮮明さに欠ける訳になるが、さらにそこから、「言葉を惜しんでいる」(*τήνδ' ἀποστερῶν φάτιν*) としてテイレシアスの沈黙を非難したオイディプスが発する言葉こそ逆に「過剰」であり、「限度を超えた」饒舌であると応酬したもの、と解することもできるだろう。P. Mazon (1972)[3]やF. Ahl (1991)[4]などが基本的にこの立場を採っている。

一方、R. D. Dawe (1982)[5]のように<*καιρός*>を「成功」「幸運」と解して、オイディプスの言葉が「我々を不幸な境遇に連れ込む」(...will lead us into an unfortunate situation)、と訳す研究者もいる。W. H. Race (1981)[6]の「うまくいくまい」(...will not be successful) や藤沢令夫 (1967)[7]の「身のためにならない」もこの範疇に入る。この場合テイレシアスの発言は、オイディプスの饒舌を直接非難するというより、彼の言葉が惹起する将来の禍いについて触れ、それが我が身にも降りかかることを怖れている、と解するわけである。

しかし、いずれの解釈を採るにせよテイレシアスのこの台詞は、それを口にしているテイレシアス自身が、劇のこの場面でごく当たり前の慣用句として与えている意味のほかに、その裏に隠された、この悲劇全体の構造とも関わるような別の内容を含んでいるように思われる。劇の幕が下りる直前、事の真相を知ったオイディプスが自分の犯した罪に慟哭し両目を潰して国を去ろうとする場面、エクソドスで我が子や実の叔父クレオン (Cr) と交わす次の会話をみてみよう。

Oe. 言っておきたかったことはたくさんある。だが今は祈るがよい、どこであれカイロスが許す土地で暮らし、お前たちを生んだこの父よりもましな生涯を全うできますようにと。

Cr. すでにあなたは充分に涙を流した。さあ館の中に入りなさい。

Oe. 辛くとも、私は従わねばならない。

Cr. いかにも、万事はカイロスに従って善いものとなるのだから。(1512-1516)

ここでは、先に挙げた箇所、第一エペイソディオンでテイレシアスの指摘（*οὐδὲ.... πρὸς καιρόν*）をまったく意に返さなかったのとは対照的に、オイディプスがより自覚的、積極的な態度を＜*καιρός*＞に対して示している点に注意しておきたい。不幸な娘たちの行く末を気遣う彼は、自らの口で「カイロスが許す土地で暮らす」（*οὗ καιρὸς ἐᾷ ζῆν*）ようにと忠告を与え、次いで、別離のときが来たと促すクレオンを相手に「従わねばならない」(*πειστέον*) と応じている。それは、もちろん言葉をかけているクレオンに「従わねばならない」のではなく、＜*καιρός*＞そのものに対してである。これを受けたクレオンの「万事、カイロスに拠って善となる」（*πάντα γὰρ καιρῷ χαλά*）に、＜*καιρός*＞を行為や言論の価値の規範に据える、当時人口によく膾炙したヘシオドス以来の箴言のパラフレーズが認められるからである[8]。

人間の実践上の行為や言論はアプリオリにその善悪は決定され得ない。為された言動は＜*καιρός*＞が要求するそれと合致したとき、はじめて＜善い＞と評価が下される。＜*καιρός*＞は、人間の行為を支配しその善悪を決定する根拠となる。これがクレオンの箴言の含意するところである。そしてこの箴言を背景として、テーバイの地を去るべきときを見据え、またそのような必然的状況におかれている自己を冷静に見つめるオイディプスの姿、言うなれば＜*καιρός*＞に正面から向かい合う――＜*πρὸς καιρόν*＞――姿が描かれているわけである。彼はクレオンの忠告を素直に受け入れたとき、人間をその外部から為すべき行為を為すべく駆り立てる強固な動因として＜*καιρός*＞を意識する。我々は、オイディプスの＜*καιρός*＞に対する覚醒とも言うべきこのような意識変化に、作者ソポクレスの作劇上の意図を感じざるを得ない。オイディプスの全生涯はアポロンが下した神託の解答に他ならないと言われる[9]が、彼はまた生涯をかけて＜*πάντα γὰρ καιρῷ καλά*＞をテイレシアスの非難に対する解答として導き出したのではないか。このように見ていくと、＜*πρὸς καιρόν*＞を諸家のように単なる慣用句的表現として簡単に片付けてしまうわけにはいかないように思われるのである。したがって我々は、この悲劇の冒頭と結末に配置された二箇所の＜*καιρός*＞を、その他の箇所とともに悲劇全体の構造との関

連において理解し直す必要があるだろう。

以上の諸点をもとに本論では、<*καιρός*>の観念がソポクレス悲劇において如何なる役割を負っているのか、その思想的背景を踏まえて考察を加えてみたい。些細な、あるいは自明のことと思われている箇所についてこだわり、再び検討を加えるのも、古来から数多の議論のあるこの作品に、また新たな角度から照明を当てたいと願うからである。

II

まず当面の課題として、先のテイレシアスの台詞に戻って考えてみよう。もともと託宣の言葉は短く難解で、それを伝える者も謎めいた語り方をするものである。その真意を慮ることもなく性急に「不誠実」(*οὔτ' ἔννομε*) で「好意的でない」(*οὔτε προοφιλῆ*) と咎めるのは、テイレシアスばかりか、彼が仕える神託の神アポロンに対しても重大な侮辱となりかねない。これを受けて、オイディプスのこの言葉こそ限度を越えた不遜なものだとテイレシアスは非難している、そのように受け取るのはごく自然な解釈である。だが、はたして<*οὐδὲ... πρὸς καιρόν*>だとされた「発言」が、オイディプスによるこのような直接の侮辱の言葉のみに限られるのだろうか。

そこで考慮に入れなければならないのは、「発言」(*τὸ φώνημα*) とは言うまでもなく実際に「声」(*φωνή*) に出された言葉であり、テイレシアスに限らず民衆があまねくそれを耳にしているということである。すなわち、テイレシアスが登場する直前、オイディプスがテーバイの国民に対して為した約束であり、布告である。彼は嘆願の小枝を手にして宮殿前に集まった群衆を前にして、威厳に満ちた口調で先王殺害の真相糾明を約束する (1-150)。ついで、犯人に対する報復措置を国民全体に布告する。殺害者本人がこの罪を恐れ自首した場合は国外追放で許されること、犯人の名を知らせた者には褒美が与えられること、犯人をかくまうことは決して許されぬこと、などを内容とし、これらに加えてさらに

もし私がそれと知りながら
犯人を館に入れ、かまどを分かちあうなら
彼らにいまかけた呪いがこの身に降りかかれ　(249-51)

と、いまだ何者か知らぬ犯人にかけた同じ呪いを自身にもかける。だが何者がライオスの殺害者であるか、という肝心のことはなぜかアポロンも告げてはくれなかっ

た。そこで次善の策として、アポロンにも劣らぬ知の持ち主とされるテイレシアスが招聘されることになったわけである（216-299）。テイレシアスはもちろんこの間の経緯は聞いて知っている。それを知り、犯人がオイディプス自身であることも知った上での＜*οὐδὲ... πρὸς καιρόν*＞の指摘である。テイレシアスにしてみれば、オイディプスが本当に声に出さねばならないのは「この私、オイディプスとはいったい何者であるのか」と問いかける言葉であって、この問いの解答が与えられるまさにそのときに「ライオスの殺害犯は誰か」というテイレシアスに尋ねようとした懸案の問題は自ずと解消され、さらには、オイディプスの素性に潜むもう一つの忌まわしい罪、すなわち母子相姦の事実も暴露されることになる。けれども、オイディプスの問いでは真相の発見にたどり着かない。そればかりか自分に向けた恐ろしい呪いの言葉まで口にしている。こうした危機に無頓着な彼の「発言」は、文字通り「見当違い、的外れ」(wide of the mark, miss the mark)[10]以外のなにものでもなく、その点ではまさしく「あなたの発言も的（カイロス）に向かって進んではいない（*οὐδὲ σοὶ τὸ σὸν φώνημ' ἰὸν πρὸς καιρόν*）ように思える」という直訳が示すそのままの意味を、テイレシアスの台詞は含んでいるのである。

確かに＜*καιρός*＞という言葉は、古来から、放たれた矢が見事に的に命中するという具体的なイメージを伴って語られることが多い。そもそもホメロスにおける最古の用例は、いずれも弓や投げ槍の「的」や「急所」の意味をその形容詞形＜*κάιριον*＞が担っている[11]。例えば、メネラオスが敵に矢を射かけられて、「急所（カイリオン）に鋭い矢が刺さったのではない」(*οὐκ ἐν καιρίῳ ὀξὺ πάγη βέλος*)(*Il*. 4. 185）から安心するように、と語る場面がある。また、同じソポクレスの『アイアス』で、狂気に駆られて陣中の家畜を惨殺した犯人をアイアスとみて追跡するオデュッセウスが、その狙いが的中しているかどうかを尋ねる意味で女神アテナに、「すると親しい女神よ、私の苦労は的（カイロス）を射ているのでしょうか」(*ἦ καί, φίλη δέσποινα, πρὸς καιρὸν πονῶ*;)(38)、と伺いをたてる箇所も、ホメロスにおける用例の延長線上にあるものとして挙げることができるだろう[12]。

一方、テイレシアスの台詞＜*οὐδὲ... πρὸς καιρόν*＞は、それが言われた当のオイディプスとは反対にまさしく＜*πρὸς καιρόν*＞な存在、直接舞台に姿を現すことはないけれども、その背後から飛翔する矢が描き出す直線のイメージそのままに言葉を投じる者がいることを我々に想起させないではおかない。「ゼウスの妙なる言葉」(*Διὸς ἀδυεπὲς φάτι*)(151）と呼びかけられ、またその昔、コリントスの王子であったオイディプスに二重の不倫を予言する言葉を投げかけ彼を亡命へと駆り立てたアポロンである。この神はさらに「遠矢射るポイボス」(*Φοῖβον ἑκαβόλον*)(162)とも形容され、苦難に呻吟する群衆（合唱隊）はその神威にすがろうと祈りの声を

あげるのである。

リュケイオスの君、アポロンよ
願わくは黄金を綯った弓弦より
無敵の矢を雨と注ぎ、我が守りと
なしたまわんことを　(203-6)

神託の言葉を矢のように射て犯人に当て、今の国難を救済せよ、この悲痛な願いを口々に宮殿に集まった人々に、オイディプスは正義女神ディケーをはじめ、その他すべての神々の加護のあることを祈って犯人探索を約束したのである (274-5)。そして民衆の祈願と王の約束がどのような形で成就するか、オイディプスに「今日の日があなたを生み、そして滅ぼすだろう」(438) と予言するテイレシアスはすでに知っている。

「知っているとはまことに恐ろしきこと」(*φρονεῖν... δεινὸν*) と呟きながら舞台に登場するテイレシアスには、目前の威厳に満ち自信にあふれたオイディプスに重ねて、すでにアポロンの予言の言葉に刺し貫かれ、血と汚辱にまみれた姿がはっきりと見えている。しかし当のオイディプスは、その昔、自分が誰の子か神託に伺いをたてたことも忘れ、その問いを放置したまま故国を亡命し、今もなお自分の真の姿も知らずに、一方では大胆にも犯人の捜索と処罰を神に誓う。テイレシアスは、民衆に国難の解決を約束し、あまつさえ自分自身にも呪いをかける彼の布告を聴いて、その尊大な態度に潜む無知なる者の傲慢さを嗅ぎつけるのである。

このように先のテイレシアスの台詞＜*οὐδὲ... πρὸς καιρόν*＞は、我々観衆に、＜*καιρός*＞の具体的内実とイメージをもとに、劇の枠外に置かれている物語の端緒——アポロンの神託によるこの悲劇の「始まり」——を記憶の底から呼び起こさせ、それがさらに必ずや訪れるであろうオイディプスの「終わり」——隠蔽されていた真相の開示と破滅——へと繋がっていくこの悲劇の筋の中心線を明確に提示しながら、同時にオイディプスの「現在」の姿をよく象徴しているのである。

悲劇における＜*καιρός*＞とは、ひたひたと迫り来る終末をすぐ後に控え、緊張を孕んだまさしく危機としての現在である。その中でも最も緊張度の高い決定的瞬間、真相が開示されるまさにそのときへと事態は飛翔する矢のように一直線に進行している。観衆の視線をはじめとしてすべての劇要素もそこへと収斂していく。そしてそれをオイディプスはまだ知らないのである。

III

では、オイディプスはどのような過程を経て＜*οὐδὲ... πρὸς καιρόν*＞な存在から＜*πρὸς καιρόν*＞――クレオンの言葉に即して言えば＜*καιρῷ*＞――な存在へと変わっていくのか。そしてテイレシアスの言葉はクレオンの箴言へとどう結びついていくのか。この過程を辿るとき、彼の変貌に重要な契機を与えた人物としてイオカステの存在を忘れてはならない。

舞台は第二エペイソディオン。オイディプスはテイレシアスの言動の裏に王位簒奪をたくらむクレオンの陰謀を感じとる。不当な嫌疑をかけられていることを知ったクレオンは、館にやって来て自己の潔白を主張し、冷静になって考えてみるように説得するが、激情にかられているオイディプスがそれを聞き入れるわけもなく、事態は両者相譲らぬ対決へと向かう。

ここで王妃イオカステの登場となる。オイディプスとクレオンの諍いをなんとか鎮めようとする人々（合唱隊）は、イオカステが折りよく到来したことを次のように二人に告げる。

Ch. 殿様がた、おやめください。ほら、ちょうどイオカステ様が
あなたがたにとってちょうど良いときに（カイリアン）
館からお出ましになるのが見えます。(631-33)

オイディプスとクレオンの緊迫したやりとりの最中に登場したイオカステは、周囲の人々には偶然にその場に来あわせた女性のように見える。しかし彼女は、その実来るべくして来た、まさに＜*καιρός*＞の属性を担う女性であり、オイディプスを巻き込みながら、彼とともに「終末」へと確実に歩を進めていく女性である。ソポクレスは、そのことをこの台詞の「イオカステが、あなた方にとってちょうど良いときに、館から出てくるのが見える」(*καιρίαν δ' ὑμῖν ὁρῶ τήνδ' ἐκ δόμων στείχουσαν' Ιοκάστην*) という一言に暗示させている。一般に、劇の進行にとって重要な意味を持つ人物が緊迫した場面に登場するときに、慣用句として＜*εἰς καιρὸν*＞、あるいは端的に＜*καιρόν*＞が用いられることはあるが[13]、ここではイオカステの補語として＜*καιρίαν*＞が使われ、「イオカステが＜*καιρίαν*＞（カイロスの女）として出てきた」という表現がとられている。このため、この一語を耳にした観衆は、あたかも「危機」が女性の姿をまとって舞台に登場したかのような強い印象を受け、オイディプスの破滅が身近にいよいよ差し迫っていることを実感するのである。

そのイオカステは「やつが私をライオスの殺害者だと申し立てている」(703) と

いうオイディプスの訴えを聞き、さらにテイレシアスとの経緯を知ると、彼女は夫を安心させるべく、以前ライオスが授かった神託を例にして、予言者というものがどれほど当てにならないかについて語り始める。

Io. その昔、ライオスに神託が下されました。
ポイボス御自身からではなく、神に仕える者からなのですが、
あの方は、ご自分と私の間に生まれる子供の手にかかって
死ぬ運命である、というお告げでした。
ところがあの方は、ある日、噂によればよそ者の盗賊どもに、
三叉の辻で殺されました。
子どもの方は、まだ生まれて三日も経っていませんでしたが、
ライオスがその両の踝を縛り、他人の手で
人の踏み込むことのない山の中に捨てたのです。
ですからこのときも、アポロンはその神託を成就されなかったのです、
子どもがその父親の殺害者になるということも、
また、ライオスが恐れていた災難を実の子から被るということも。(711-21)

イオカステのこの発言の意図は明白である。以前に予言者が自分たちに語ったお告げは成就しなかった、だから今テイレシアスの言っていることも信じるに値しないというわけである。しかし、イオカステの話を聞いた途端、オイディプスは「三叉路」という言葉に半ば忘れかけていた事件を思い出して血相を変え、ライオスの年齢や背格好を質し、犯人が「盗賊ども」(14)という一点を除いてすべての証言が自分を殺害犯として指していることに愕然とする。そして、そのときの事件の目撃者がただ一人羊飼いをして暮らしていることを聞き出すと、一縷の望みをかけて彼を呼び寄せ証言を求めようとする。

ところで、予言者不信、神託不信を表明したこの言葉、言い換えれば、オイディプスを安心させるという意図とは裏腹に彼を不安に駆り立て、さらなる探索に向かわせることになったこの台詞には、詭弁とは言えないまでも、イオカステ自身がおそらくは気づくことのなかったであろう論理展開の無理が含まれている。すなわち彼女は、

①ライオスが我が子に殺されると予言される
②その予言の実現を恐れて子どもを山中に捨てる
③ライオスが三叉路で盗賊に殺される

という本来の事実経過を、②と③を入れ替えて説明するのである。そしてその結

果、ここから

①ライオスが我が子に殺されるという神託が下るが、彼は盗賊に殺されたのであり、神託は成就しなかった

②我が子がライオスを殺すという神託が下るが、子どもは山中に捨てられ（て死んだのでありライオスを殺せる筈もなく）、神託は成就しなかった

という二重の神託不成就の根拠が導かれ、これに伴い、

①山中に捨てた筈の子どもが救われ成長してライオスを殺害するに至り神託は成就する、ということもあり得る

②その場合、ライオス殺害犯は同時にイオカステの子でもある

という、恐ろしい可能性が潜んでいることもこのような論理形成の中で見逃されてしまうことになった。オイディプスは、彼女と言葉を交わすうちに自分こそが殺害犯ではないかとの疑いを強くし、その不安に苛まれながら、それでも自分とイオカステやライオスとの間の血縁関係を意識することはなく、依然として自分が真に誰であるのかを知らず、またその素性を真剣に追求しようともしないのである。

では、なぜイオカステはこのような論理展開に基づいてオイディプスを説得しようとするのか。先にも述べたように、そこに意図的な操作が働いているとは考えにくい。次に触れる第三エペイソディオンの場面とは異なり、この時点ではまだオイディプスの素性はまったく話題となっておらず、また、イオカステは彼がライオスの真の殺害犯であることについても微塵も疑念を抱いていない。仮に、それに薄々でも気付くことがあって、それでもなお自分たちの名誉と今の幸福を守るために彼のさらなる探索を阻止しようと思うのならば、このような昔話をわざわざ披露する必要はない。ライオス殺害犯を具体的に示唆する事件の子細——殺害現場、被害者の特徴、証人の有無など——を絶対に隠しておくことが、オイディプスに自身の素性を気付かせないようにする最善の策だからである。したがって、彼女が無意識のうちに時間経過を無視して過去の事実を辿っているのは明らかであろう。

では、なぜか。そこに彼女の本来的な生き方、態度が反映されているように思われる。結論を先取りして言えば、彼女の意識下では過去に生じたこれらの出来事が、様々に錯綜する時間の座標の中に at random に配置されており、それらが相互に意味づけられ直線的な時間軸のもとで一本の線に結び合わされることはない。彼女にとっては、直面する現在もまた過去とは無縁の在り方をし、そこに特別の意味や目的を見出すことはできないのである。彼女はそれを「偶然」(τύχη) [15] と呼び、それに従った生き方を「成り行きまかせ」(εἰκῇ) と言う。第三エペイソディオン、オイディプスの故国で父王ポリュボス病死の知らせが届き、オイディプスに下された神託の一つが実現されなかったことを知って自分が言った通り予言など当てにな

らない、と有頂天になるとき、イオカステの自身の口からそれが語られる。

Io. 何を恐れることがありましょう。人の身は偶然に属する事柄
が支配しているのであって、先のことなど何ひとつ定かではないのです。
できるだけ成り行きまかせで生きるのが最善なのです。
あなたは母上との結婚を恐れたりなさいませんように。
これまでに夢の中でも母上と寝床をともにした者は
大勢おります。でも、そのようなことをまったく
意に介さない者が誰よりも気楽に人生の荷を担うのです。(977-83)

予言者に対する不信を表明した先の言葉は、なお母子相姦の禁忌の穢れを怖れるオイディプスを前にして、さらにアポロンの神託そのものに対する侮辱、神託否認とも受け取れるような響きを持って繰り返されている。イオカステはそのなかで、自ら「偶然に属する事柄が支配する人間」(*ἄνθρωπος ᾧ τὰ τῆς τύχης κρατεῖ*) のひとりとして、「できるだけ成り行きまかせで生きるのが最善」(*εἰκῇ κράτιστον ζῆν, ὅπως δύναιτό τις.*) とまで言い切るのである。そして彼女のこの言葉に、「万事、カイロスに拠って善となる」と語り、<*καιρός*>を実践的行為の原理に据えたクレオンとは異質の態度を見いだすのは容易であろう。

人間を支配するのは果たして<*τύχη*>なのか<*καιρός*>なのか[16]、これはひとえに現在を過去に生起した様々な出来事と必然の連鎖で繋ぎ、そこに積極的に神の介在を認め、その意図を見いだすかどうかにかかっている[17]。彼女は<*τύχη*>を叫ぶことでその連鎖を断ち切り、過去——アポロンの予言に端を発する一連の事件を現在に結びつけまいと懸命になる。オイディプスの不倫はもはや他人事ではない。真実を受け入れた瞬間、彼女自身もまた汚辱にまみれた不浄の者となるからである。彼女は神的な秩序にあくまで抵抗して、自分が直面する危機的現実からは頑なに目を背けようとする。この虚しい抵抗を試みることこそ、実の子を夫としたイオカステに残された唯一の生きる方途である。そしてこの意味では、イオカステもやはり<*οὐδὲ... πρὸς καιρόν*>な存在なのである。

Ⅳ

舞台に登場した当初から<*καιρός*>の宿命を帯びたイオカステは、最初に舞台に登場した第二エペイソディオンでは無意識に、次に登場する第三エペイソディオンでは明らかに意図的に運命の矢の進行を反らそうとする。では、オイディプス自身

はこれから<*καιρός*>にどのように関与していくのだろうか。

第三エペイソディオン冒頭から見てみよう。苦悩するオイディプスを救うためにイオカステがアポロンの社に詣でて祈願しているときに、まるでそのアポロンが遣わしたかのように、コリントスから使者が父ポリュボス王の病死を知らせにやって来る。オイディプスは自分に下された神託のうちの一つが成就しなかったことにひとまず安堵するが、母メロペが生きている以上、やはりもうひとつの神託の成就を恐れずにはいられない。二人のやりとりを聞いて事情を知った先の使者は、オイディプスを安心させようとして彼の破滅にとって決定的な一言を話す。オイディプスはポリュボスとメロペの実子ではなく山中から拾われてきたのだ、と。赤子のオイディプスを救い出したのは、偶然にも先に話の出た羊飼いであったという。そこで、ライオスの殺害とオイディプスの出生の共通の証人である羊飼いをあらためてめて呼び寄せようとし、長い自己探求の幕引きをこう宣言する。

Oe. ここにいるお前たちの中で、
この男が言う羊飼いを、田舎でか、それともここで
知ってるものはいないのか、教えてくれ。
今こそ事態が明らかにされるべきとき(カイロス)なのだ。(1047-50)

ついにオイディプス自身の口から<*καιρός*>の一言が発せられる。もはや真相が開示される現場から目を背けることはできない。彼にとって、明かされるべきなのはもはやライオスの殺害犯ではなく我が身の素性である。オイディプスと使者とのやりとりを聞くうちに彼の正体に気付くに至ったイオカステは、顔色を蒼ざめ「神々にかけて、ご自身の命が大切だと思うなら、後生ですから詮索を止めるように」(1060)、と必死の抵抗を繰り返すが、かなえられないと知ると「ああ、哀れなお方」と叫んで舞台から退場する(1071)。しかしオイディプスは、彼女の命を懸けた忠告にも耳を貸さず、重くのしかかる不安を吹き払うかのように次のように叫ぶ。

Oe. なんであれ吹き起こるがよい。自分の生まれがいかに
卑小であろうと、わたしはしっかりとそれを知るつもりだ。
あの女は、女にしては気位が高い。おそらく
私が卑しい身の上であることを恥と思っているのだ。
だが、私はみずから、恵み深い<偶然(テュケー)>の
息子と信じる者、この身はけっして辱めを受けないだろう。
偶然こそが私の生みの母、そして経巡る歳月が私の兄弟、

この歳月とともに、私はときに卑小な者となり、ときに偉大な者となった。
このような生まれを誇る私が、どうしていま別の人間になり果て、
わが素性を突き止めることを恐れようか。(1076-85)

罪の不安に怯えながら、最後まで糾明を止めないことを誓うオイディプスの自信の背景にも、イオカステと同様に<*τύχη*>が控えていることが、ここに明らかである。絶体絶命の危機を感じながら、なお一縷の望みをかけて<*τύχη*>にすがるより他はない。彼は自分が「偶然(テュケー)の息子」だと言う。しかし<*καιρίαν*>(カイロスの女)として登場したイオカステが退場した今、舞台にはオイディプスが先刻<*καιρός*>を宣言した身で、あたかも危機を一身に纏うように舞台に踏みとどまっている。彼もまたその正体は「<*καιρίαν*>(カイロスの女)から生まれた息子」なのである。

さらに舞台は第四エペイソディオン、この劇のいわゆる<運命の逆転(ペリペテイア)>と<発見的認知(アナグノーリシス)>の場を迎える。オイディプスは言い渋る羊飼いを問いつめ、「恐ろしいが、聞かねばならぬ」(*κἄγωγ' ἀκούειν· ἀλλ' ὅμως ἀκουστέον.*) (1170) として、隠された出生の秘密を自ら暴き出す。ここにデルポイの神託を司る神アポロンは、また遠矢射る弓神という本来の姿を顕現させ、すでに遠く過ぎ去った過去、意識外の世界から予言の矢を射かけて見事に「的」に的中させた。出生の真相を知ったオイディプスは「すべてがあやまたず成就した」(1182) と叫び、我が身がアポロンの神託に端を発する事の「始まり」から「終わり」へと、すなわち破滅へと収斂されていく線の遡上をそれと知らずに歩んでいたことをはじめて悟る。「偶然(テュケー)の息子」を自負しながら「事が明らかになるのは今、このとき(カイロス)」(*ὡς ὁ καιρὸς ηὑρῆσθαι τάδε.*) (1050) と叫び、必然的な「終わり」をすでに定めていたことを振り返る。こうして<*καιρός*>の意識化・自覚化とともに、彼の脳裏に、脈絡がなくただ点々と<*τύχη*>として映し出されていた過去の行為と出来事が直線化・整序化され、直線的な時間軸のもとに一本の筋として結合されていく。そしてその直線は、アポロンやさらにその先のゼウスに端を発し、人間世界をも含むこの宇宙万有を貫いている神的秩序、正義の具現としてオイディプスに感得されるに至るのである。

けれども、<*καιρός*>の感得は単に客観的事実としての危機(カイロス)の知得を意味するものではない。それは同時に、<*καιρός*>に対する的確な応答・責任を、あくまで主体的行為者として果たすように要求されることを意味する。事実、このとき、彼が自ら為すべきだと判断し実行に移したことがある。館に入り、すでに縊死していたイオカステの衣服から黄金のピンを抜いて自らの眼に突き立てることである。オイディプスに対していまだ敬愛の念を失わない人々（合唱隊）は、再び舞台に登場した彼の無惨な姿を見て「ああ、不幸なお方、いったいどのような狂気（*μανία*)が

あなたを襲ったのですか、いかなる神(*δαίμων*)があなたの不幸な定め(*δυσδαίμονι μοίρᾳ*) にかなたの高みをなお越えて跳びかかったのですか。」(1299-1302)、「恐ろしいことをなさったお方よ、どうしてそのように目の輝きを消されてしまったのですか。神の (*δαίμωνων*) どなたがあなたを駆り立てたのですか」(1327-28) とたたみかけるように問いかける。彼らには、眼を潰すというオイディプスの行為が、理性を奪われ、錯乱状態に陥った者でなければ為さないこと、心ばかりか肉体まで傷つけ「二重の禍いを嘆き、二重の責苦に喘ぐ」(1320) こととしか理解できず、その背後に何か神的 (*δαίμων*) な操作を感じぜずにはいられないのである。だが、オイディプスは彼らの心遣いに感謝しつつ淡々と次のように語る。

Oe. アポロンだ、それはアポロンなのだ、友よ、
わたしのこの悲惨な苦難を成就したのは。
だが、他の誰でもない、目を突き刺したのは惨めなわたし自身だ。
何を見ればよかったというのか、
見て楽しいものは何一つないわたしなのに。(1329-33)

確かにオイディプスは、運命の筋道を過去に辿り、現在のこの不幸の起源をアポロンに求めている。しかし他方では、自分自身の手で正気のうちに眼を潰したことを主張して譲らない。自分をいまここにあらしめているものは何かという、その<根源(アルケー)>を捉えた上で、我が身に生じた事態からもけっして眼を背けない。先には「聞かねばならぬ」(*ἀκουστέον*) (1170) と見るに耐えない現実を強靭な意志で自ら暴き出した。今度も、この現実をはっきり直視しながら、為すべきだと判断したことをそうすべきときに、自らの自由意志と責任によって果たしたというのである。彼は、直面する現在に<*καιρός*>を認めた瞬間、一方ではアポロンの意志を感得しながら、他方では、その神的秩序・正義が成就する<終わり(テロス)>を見据え、そこへ至る途の遡上に自己を挿入し、その最後の一歩を自分の意志で歩もうとする。さらに彼はこう続ける。

Oe. だが、このことだけは分かっている、わたしを滅ぼすものは病でも、
また他の何ものでもないということを。そうでなければ、決してわたしは
死から救われはしなかったろう、何か恐ろしい災いに遭うためでなければ。
だが、わたしの運命がいかなるものであろうと、どことなりと行くがよい。
(1455-1458)

両眼を潰したオイディプスには、これからまだ為さねばならぬ事として、国民に約束した通り自分自身を国外追放の刑に処すことが残されている。自分はこのテーバイの国を出てこれから先に出会う運命のすべてを見届けねばならない。彼は我が身の「運命」(*μοῖρα*)に「行け」(*ἴτω*)と命じることによって、その決意を示す。そして、彼のこの言葉がクレオンの忠告<*πάντα γὰρ καιρῷ καλά*>を受け入れて舞台から去るあの別れの場面に直接繋がっていく。それがいかに辛くとも、<*καιρός*>には「従わねばならない」(*πειστέον*)のである。こうしてオイディプスは、<*καιρός*>に正面から向かい合う——<*πρὸς καιρόν*>——ことで、最後に人間、それも主体的行為者としての人間の尊厳を守ろうとするのである。

結　語

我々はこれまでに『オイディプス王』における五箇所の<*καιρός*>——1ep. 325, 2ep. 631, 3ep. 1050, ex. 1513, 1516——を検討し、それが単なる慣用句的表現にとどまらず、この悲劇の構造全体に密着したより深い意義を担うに至っていることを見てきた。悲劇における<*καιρός*>とは、なにより終末を寸刻先に控えた緊迫感に溢れる危機であった。そしてそれが意識されたき、<*καιρός*>は実践行為に指針を与える価値の規範として、また人間を外部から行為に駆り立てる強力な動因として立ち現れるのである。このような<*καιρός*>の観念は、本論で省みたように、この悲劇の筋立てに統一性と緊張感を与えながら、全体の構成にきわめて効果的に機能していると言えるだろう。

このことはまた、<*καιρός*>に対する登場人物の関与の仕方にも端的に現れている。すなわち、すべてを見通す知者として「*καιρός*を捉える」予言者テイレシアス。伝統的な宗教倫理を尊重する常識人として去りゆくオイディプスに「*καιρός*に従うことが善い」と優しく諭すクレオン。これらに対して、「*καιρός*を捉えておらぬ」と非難されたオイディプスは、あくまで自説を譲らぬ頑迷な自信家として舞台に登場する。ただ彼がイオカステと異なるのは、彼女が最後まで<*καιρός*>から目を背けていたのに対し、彼は自己を再発見することにおいて「*καιρός*を知った」ことであろう。そして悲劇全体を俯瞰すれば、<*καιρός*>の自覚へ至るこのオイディプスの意識変化が<発見的認知(アナグノーリシス)>及び<運命の逆転(ペリペテイア)>に同期するという構造を成しているのである。

『オイディプス王』に際立って示された<*καιρός*>の観念は、これ以降に著された作品にも顕著であり、ソポクレス悲劇の根抵に横たわるひとつの原理を呈している。『エレクトラ』において、オレステスは「今こそ好機(カイロス)、人間にとってあらゆる

仕事の主君たる好機だ」(*καιρὸς γάρ, ὅσπερ ἀνδράσιν μέγιστος ἔργου παντός ἐστ' ἐπιστάτης*) と叫んで冷静に復讐の機会を窺い[18]、何の躊躇いもなく実母を殺して父親の仇を討つ。『ピロクテテス』では、ネオプトレモスが「好機(カイロス)は万事についての判断を握っているのだから、一瞬のうちに大いなる戦果をあげるものだ」(*καιρός τοι πάντων γνώμαν ἴσχων πολύ παρὰ πόδα κράτος ἄρνυται*) と促されても[19]、友情を感じ始めた相手を騙してその魔弓を奪い取ることになお躊躇する。そしてこれらの悲劇に共通して認められるのは、劇中人物の行為の<*καιρός*>に注がれるソポクレスの冷徹な視線である。

<*καιρός*>へのこのような視線の背景に、ソポクレスの個人的な経験が介在していることは想像に難くない。彼は卓越した悲劇詩人であると同時に、ペリクレスの僚友として度重なる国難に対処していた実践政治家であった。ペロポネソス戦争下、国運は次第に衰退に向かいつつあるまさに危機にあり、祖国の行く末を見定めつつ、正しいこと、為すべき義務を模索しなければならない政治家として、彼は常に自分自身の内に<終末>を意識し、行為する<*καιρός*>に関心を持たざるを得なかったであろう。

ただ、忘れてならないのは、悲劇そのものが本質的に<*καιρός*>と不可分だということである。アリストテレスは悲劇を「完結したひとつの全体として一定の大きさをもった行為を再現したもの」と定義している[20]が、我々の「行為の再現」としての悲劇が生起する場こそ<*καιρός*>だからである。そてしこの意味においては、終末とはけっして時間的未来において存在するものではない。人間は、行為するその瞬間瞬間に行為の是非を厳しく問われ、その時点ですでに終末を迎えているのである。テイレシアスは、スピンクスの謎を解いた自分の叡知を誇るオイディプスに劇の冒頭でこう言い放つ、「まさにその幸運(テュケー)があなたを滅ぼしたのだ」と[21]。オイディプスがデルポイからの帰途にライオスを殺したとき、そしてスピンクスを倒した褒美にイオカステを娶ったときに、彼はすでに処断され、破滅しているのである。

このように、ソポクレスは<*καιρός*>に厳しい視線を注ぐことによって、人間の行為そのものに潜む本質的な悲劇性を見出したのである。

注

(1) <*καιρός*>は近代語にそのまま翻訳することは不可能とされるが、以降の議論に齟齬が生じるのを恐れるため、この用語が有する観念についてここでより正確に把握しておきたい。<*καιρός*>は一般的に「時宜」や「好機」などのように時間観念を表に出して訳されるのが普通であるが、用語使用の実際によって

基本的に次の二つの内実を読み取ることができる。

① ある運動の「終末点」、意識の「収束点」

② 全時間＜χρόνος＞のなかに自己を挿入する、または挿入される時点、瞬間

この用語が動詞の不定法とともに用いられた場合、ある行為を為すのに適正な時機を指し、行為者には行為すべき「いま」「現在」として感得される。そして、ある行為が＜καιρός＞によって限定されて語られるとき、行為者は抜き差しならない世界に投じられ、その世界に対する適切な応答や責任が迫られることになる。これは見方を変えれば、ひとつの宗教的世界が＜καιρός＞を用いた言表の背後に仮構され、それと同時に我々はこの＜καιρός＞を行為の動機、動因として行為するのである。

なお＜καιρός＞の観念については B. A. Van Groningen, *In the Grip of the Past: Essay on an Aspect of Greek Thought*, E. J. Brill, Leiden, 1953 (Philosophia Antiqua, Vol.Ⅵ)(野口杏子他訳『過去からの発想――ギリシア思想の一つの相についてのエッセー』未来社1988) 179頁注(3)、の他に拙論「ブラキュロギア――プラトンにおけるもうひとつのピロソピアーのあり方について――」『文明研究』第7号、東海大学文明学会(1988) 41-51頁、「καιρός と正義――ヘシオドスの『仕事と日』694行の解釈を通じて――」『バルカン・小アジア研究ⅩⅧ』東海大学バルカン・小アジア研究センター(1991)25-41頁でその基本的な考え方について整理してあるので参照されたい。

(2) R. C. Jebb, *Sophocles: The Plays and Fragments, Part 1 The Oedipus Tyrannus*, Cambridge, 1914. 54p.

(3) W. H. Race, The Word καιρός in Greek Drama, *Transactions of the American Philological Association* 111 (1981) 197-213 pp.

(4) F. Ahl, *Sophocles' Oedipus : Evidence and Self-Conviction*, Ithaca, 1991. 80p.

(5) R. D. Dawe, *Sophocles: Oedipus Rex*, Cambridge, 1982. 125p.

(6) P. Mazon, *Sophocle, Ajax Oedipe Roi Electre*, Paris, 1958 [Les Belles Lettres]. 84p.

(7) 藤沢令夫訳『オイディプス王』岩波文庫 1967.

その他『オイディプス王』の解釈に際して、使用した研究書・注釈書は以下の通りである。

J. T. Sheppard, *The Oedipus Tyrannus of Sophocles*, Cambridge, 1920., C. H. Whitman, Sophocles: *A Study of Heroic Humanism*, Cambridge Mass. 1951., C. Kamerbeek, *The Plays of Sophocles, Part 4 The Oedipus Tyrannus*, Leiden 1967., H. Lloyd-Jones, N. G. Wilson, *Sophoclea: Studies on the Text*

of Sophocles, Oxford, 1990.

(8) <*μέτρα φυλάσσεσται· καιρὸς δ' ἐπὶ πᾶσιν ἄριστος*>(Hesiodos *Er*. 694), <*ἔπεται δ' ἐν ἑκαστῳ μέτρον νοῆσαι δὲ καιρὸς ἄριστος.*>(Pindaros *Ol*.13.47-8), <*μηδὲν ἄγαν σπεύδειν καιρὸς δ' ἐπὶ πᾶσιν ἄριστος ἔργμασιν ἀνθρώπων.*>(Theognis 401-2)

(9) R. W. Bushnell, *Prophesying Tragedy: Sign and Voice in Sophocles' Theban Plays*, London, 1988. 67p.

(10) *Il*. 4. 185, 8. 84, 326　他に派生語として<*κατακαίριον*>*Il*. 11. 439がある。

(11) これの類例として、他にアイスキュロスの『アガメムノン』365, 787, 1292, 1343, 1344, ソポクレスの『エレクトラ』31, エウリピデスの『フェニキアの女たち』1431, 『アンドロマケ』1120等がある。

(12) 悲劇において、ある人物が舞台に登場する際に<*καιρός*>用語が用いられるのは、その人物が劇の筋立てにとって重要な役割を演じ、劇の展開に転機をもたらす場合にほぼ限定されており、ソポクレスに4例、エウリピデスに12例みられる。この場合に<*καιρός*>が補語として直接人物を形容する例は全悲劇作品中でも唯一この箇所のみであり、またこの作品中でもクレオンが舞台に登場する際——85、513、1416——にはまったく用いられていないことに留意すれば、ソポクレスがこの劇を構成する上で、第二エペイソディオンにおけるイオカステの役割をきわめて重要視していたことは容易に窺える。

(13) 殺害犯が複数だったという証言を得られれば、オイディプスが真犯人である可能性は無くなる。したがって、彼は一縷の望みをかけて証人を呼ぼうとするわけである。

(14) そもそもオイディプスは、「ふとした成りゆき(*τύχη*)」(776) によってわが身の素性を怪しみ、祖国を亡命したのであり、また今回のライオス殺害犯糾明も、「かつてわれわれによき幸運を (*τύχην*) もたらしたように、今度もまた国の困難を救いたまえ」(52) と懇願されて始まったのである。諸家が指摘するように、オイディプスが自分の正体を知るに至るまで彼を支配するのは「偶然」や「幸運」としての<*τύχη*>であり、12例見られる。それを内容によって分類するとほぼ以下の通りになる

<偶然の出来事>680, 773, 776, 977, 1036

<幸運>52, 80, 442, 1080, 1526

<偶然の死>102, 263, 949

久保正彰「第五章　偶然と必然のたわむれ——ソフォクレスの作劇法と宗教性——」『美の哲学』斉藤忍随他編　現代哲学選書12、学文社、1973、186-207頁、

真方忠道「ギリシア人と偶然」理想社『理想』1978, Vol. 2, No. 537 96-118頁、川島重成『ギリシャ悲劇の人間理解』新地書房、1983、139-159頁 第四章『オイディプス王』における真理とダイモーン ——盲目と跳躍のイメージ——参照

(16) プラトン『法律』では＜τύχη＞と＜καιρός＞に関して次のような記述がある。「神が万物を統べ、また神を助けてテュケーとカイロスが、人間の為す事柄の一切を統べている、ということだ。だが第三のものとして、より温順な技術が以上のものに続いていることを認めなくてはならない。というのも嵐の場合には、舵取り術がカイロスを助けてこれと共同するか否かによって、その得失はきわめて大であると考えたいのだ。」(IV. 709b-c)

またこの両者の対応をよく示す箇所として他に一例挙げておく。エクソドスにおいて、我が子に脇を支えられつつ寂しく舞台を退場するオイディプスを、合唱隊は次のように歌って見送る

Ch. おお祖国テーバイの人々よ、見よこれがあのオイディプス、
かつては世に名高き謎の解き手、権勢並ぶ者もなく、
誰もがその幸運（τύχαις）を見て羨まずにはおれなかったその人が
ああなんと恐ろしい不幸の大波に呑まれたことか。1524-27

オイディプスが得たと思われた「幸運」は文字通り「偶然」の産物、砂上の楼閣にすぎなかったのであるが、このことは第二スタシモンで「カイロスにかなわぬ富」として彼の運命とともに予言されているのである。

Ch. 驕慢 は暴君 を生む。
驕慢は、もしカイロスにかなわぬ（ἃ μή 'πίκαιρα）益なき富に
濫りに充たされるならば、
笠石の頂きに登りつめては、
たちまち避け得ぬ断崖の底へところげ落ちる。873－877

(17) Doddsは、ある事態を＜τύχη＞と称する精神的背景には神の介在を認めない世俗的態度が現れているとする。E. R. Dodds, The Greeks and the Irrational, California, 1956, pp. 42-3, note (80)（岩田靖夫他訳、『ギリシア人と非理性』みすず書房、1972）

(18) 『エレクトラ』75-6

(19) 『ピロクテテス』837-8

(20) 『詩学』1450b 23-25

(21) 『オイディプス王』442

追記　本論におけるソポクレスの引用は、基本的には岡道男訳「オイディプース王」『ギリシア悲劇全集３』岩波書店（1990）に拠り、一部を内容に合わせて改変して使用させていただいた。